

089470-000-4

特64-689

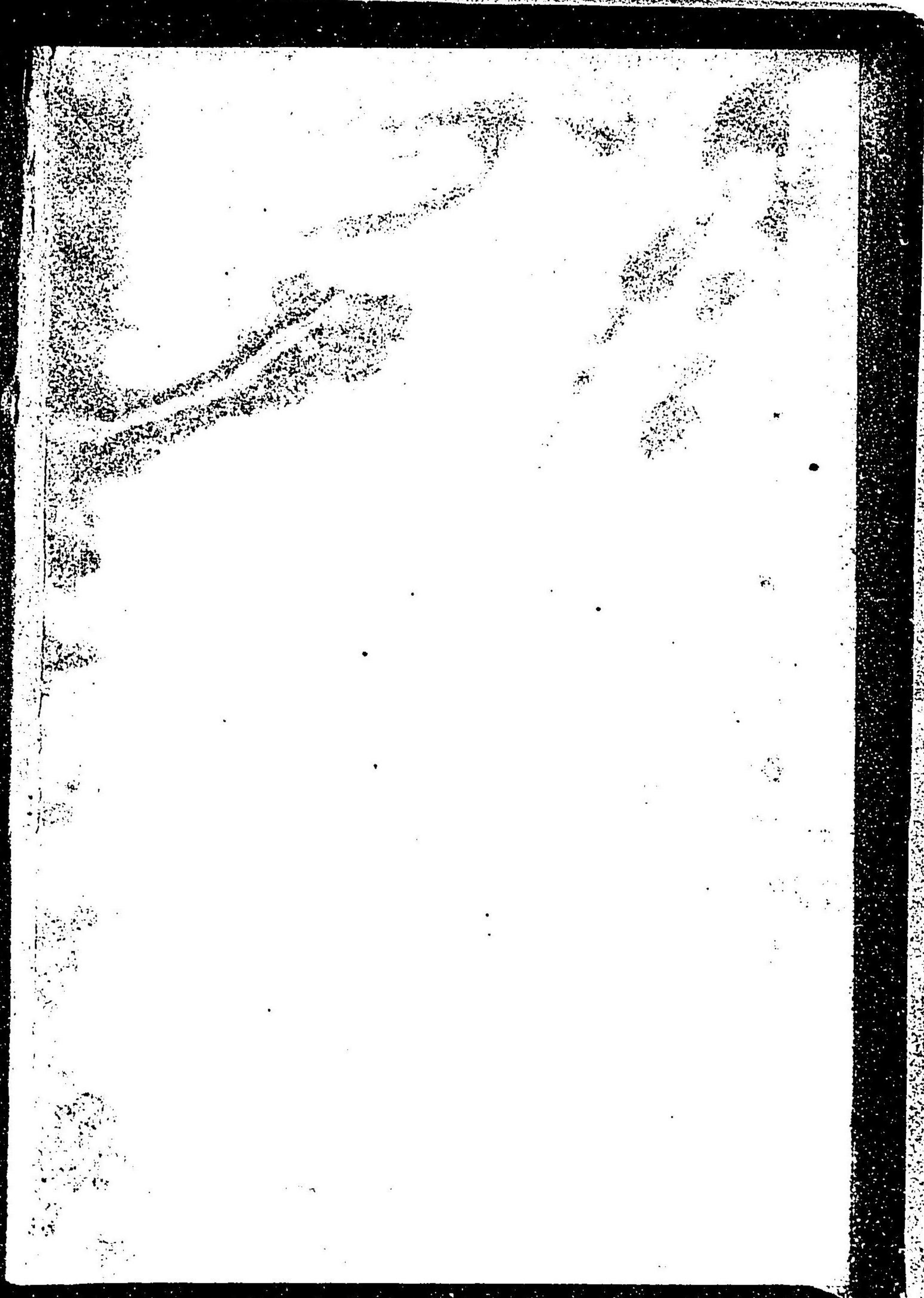
園雪三勝草紙

為永 春水/著

M19

DBM-1203





明治十九年十二月六日内務省交付ノ旨

特 64  
689

序叙

昨日は今日の世界の  
今の世の世の世の世の  
まじりたる世界のもの  
我々の世の世の世の世の  
屋の屋の屋の屋の屋の  
作者の作者の作者の作者の

知りつゝ老をむ自他の通弊扱  
亦如女もあまのときあし  
界の界の界の界の界の  
りを取りしと大評判の  
うらうら世界を仮花八支ト  
これとわく探り索りて新規を  
髪髻たまごを只勸懲が  
ふ注目たあへ

爲永春水誌る

教訓亭の南窓下







時雨の夜屋敷三郎草紙

爲永春水戲作

第一回

心なき身にも友なきとあふまきなり 晴立沢の秋の夕暮と團上人が説くりりハ只何  
 とおく沢辺は晴の立ちる黒色をいへるにしてあふまき何れかと定めざりしとるん  
 亦一語ハ昔ハ罪人を刑する所にて晴立沢ハ死來津沢にてるハ城守殿人掛る  
 るよりといふ人あめまごハ甚しき事強附會の術こそ幸ハとまきかくまき此  
 書は用るまきまきまきまきハあふまきつあまき何れの頃おひまやありん此晴立  
 沢の辺りハ寂莫法印とよべる後敷者住かりこの法印よく人の福福吉凶をまきこ  
 と唐土の管轄我朝の伴の別當ハいざいざ指の巫ままたりしと云ひりてを  
 やまりのうら一犬形に吼へて轟大声は吼るるハ日毎は聞傳へてあま集りてげ  
 をむふ者数をあふまきまきまきハ門前市をまきてぞ聞ひたる今日も何れのごとく朝  
 まきまきよりあまつごハ人々ハ押合へるあひ前後をあらそひ詰かくるまきあま

法印の番附を定めおさいとりの...  
り口は何やら思文をこまへ封技...  
るに皆々法印の許の...  
の人も皆散々かへり行跡...  
るむとりの侍法印は打向び...  
るが些あり入つて貴殿に...  
りの人をせらつゝ其の上...  
り目録包をとり出し法印...  
ハく...  
バとくも御館へ召呼るべき...  
の御入來何かさてうけ...  
ハ奥の下階の神前へ委細...  
印が詔は侍打点頭...  
バ御免と云ひつゝも奥へ...  
づういふさまをまゝ表向...  
御付らま候ともぞいふん...  
貴殿のお願のことより斗ら

ふてござらしかと云へ侍打...  
と首尾よくまいつゝ上ハ...  
へる畢竟こそ如何なる工...  
更なるうり々で○爰は...  
せ玉ふといへども將軍...  
會次郎大夫家の政更と...  
此世我去り玉ひ々ま...  
くるかきうかむといへど...  
弟大膳といへる者組あ...  
折候のりの局浅尾とい...  
居る勝野といへるハ先...  
に別き此輩はて一世奉...  
々るが此勝野あると長...  
おどろき何とぞ彼を罪...  
おどろき何とぞ彼を罪...









買にもあふくんとあた果とやんにそふいハハ八かぬハ横りこの正月も賣  
 舟を賣に出さう大分あまやア錢にかるものごと聞とがふて有たニハヤモウ賣  
 舟と聞てもこそ多くもるとんと賣七八百も撰找して一枚も賣さかんご  
 一枚もうきぬとハマアとふい一ともので有ふそしてかぬハいつ出やつと一八  
 つといふてまアあまや皆いつうまに出る者や 志と事正月の二日の初舞小枕  
 の志とへ敷て寐る賣舟老やによつて元日二日と賣老やニサアその元日二日ハ志  
 きてあるがめつやう賣てが多し程ふこーハぐつとむねつて三日の朝うらうまに  
 出さトや 碓川と馬鹿找ぬりせそきでどふしてうきるもんど何り元手いらずに錢  
 の澤山もふりる商賣の有里そふ物トやト頭をりけバ仲間のうち古兵と呼まこ  
 る盛八といふ親父り皆のもの小打向ひ盛八ヤク一八も碓屋もそまや皆とま  
 人達り手前勝手の不理窟といふもの元手いらすは解かち申は錢金もふりると  
 いふ物の三千世界あるものりあきアノを月さまや天道様を見やーや毎日夜  
 びるとげどいなく出て居さつまやきてけふハ寒いりらといふてあまけさーやつ  
 こといふ事もさうに暑いりらといふて一日体ふとい日つまやつこといふともあ  
 い替へ兩や雪が降るとして下ごそ曇いやつパリ上でハ天道さぬハ出てこざるん





ふうち九ツでも有がぐどや往て疎よトうち遣てくる所へ帯とける引も半七の  
 妻をいふ素足にてもうける一人りの若き女子をいふ川へとひらきひいてとめと入る花  
 水たりのらんより南無あぶつととるへつちてみ川へとひらきひいてとめと入る花  
 かつらととらへ半七コレか女中まやまつくしきやせやまひさくたるまてころとて  
 と身をもせるのを動りせざ半七のふと意を極め定めて懸路のいせつて二  
 世とりハきと其人へ生て居てハいんぬといふせしないくる一い譯ても有がぐか  
 前もまが若いお方傘や囀ぬぐでせりませよその方ぐいりせりそのを思  
 みて命をぬぐらへ此世にまのてごごつて又秋風が吹ふもきをぬそのよふる事  
 てもぬくハ膝とも談合でーグヤシる音でも嘶て見へ何ぞまてたそくよなる様  
 る事もあるものまよとつくと譯を聞きせて下をりませト情も深き詞のそ聞  
 て女ハ打よごび女どるぬりハ子んがませぬが深切る其が詞私ことハ親も  
 るく兄弟もるく幼少と泡より孤とる杖柱とも思ふる大恩うけしは主人ぬよ  
 かこりませぬ一悪人たらのユミより一も座敷卒の苦志も神や仏のか力てあや  
 うい命ハ助りせど又歸るべき家よけきバせんりくも此川の底の水漲と成り  
 きるトつと泣けバ半七ハ聞ハきく程便のまらこも母の身の上其日ぐら一の  
 こーらまど袖すも合ても他生の縁と死をもめつても何ぞの因念今宵ハ私り家へご

だつてとつくと嘶を聞の上女も有がぐどや往て疎よトうち遣てくる所へ帯とける引も半七の  
 妻をいふ素足にてもうける一人りの若き女子をいふ川へとひらきひいてとめと入る花  
 水たりのらんより南無あぶつととるへつちてみ川へとひらきひいてとめと入る花  
 かつらととらへ半七コレか女中まやまつくしきやせやまひさくたるまてころとて  
 と身をもせるのを動りせざ半七のふと意を極め定めて懸路のいせつて二  
 世とりハきと其人へ生て居てハいんぬといふせしないくる一い譯ても有がぐか  
 前もまが若いお方傘や囀ぬぐでせりませよその方ぐいりせりそのを思  
 みて命をぬぐらへ此世にまのてごごつて又秋風が吹ふもきをぬそのよふる事  
 てもぬくハ膝とも談合でーグヤシる音でも嘶て見へ何ぞまてたそくよなる様  
 る事もあるものまよとつくと譯を聞きせて下をりませト情も深き詞のそ聞  
 て女ハ打よごび女どるぬりハ子んがませぬが深切る其が詞私ことハ親も  
 るく兄弟もるく幼少と泡より孤とる杖柱とも思ふる大恩うけしは主人ぬよ  
 かこりませぬ一悪人たらのユミより一も座敷卒の苦志も神や仏のか力てあや  
 うい命ハ助りせど又歸るべき家よけきバせんりくも此川の底の水漲と成り  
 きるトつと泣けバ半七ハ聞ハきく程便のまらこも母の身の上其日ぐら一の  
 こーらまど袖すも合ても他生の縁と死をもめつても何ぞの因念今宵ハ私り家へご

第三回

日ハ暮きて野はハとよみしーいよーへのその一葉は引りへて軒波並べ揚枝店賣  
 ぶ諺の賣物は花をかざりー粧ひハいつまなとらめ梅標生花よせー風情なり毎日  
 爰伐地まハりの餓鬼大将の人間官職浪人るり二腰ハいつもせるさぬ勿体頼仲  
 間の悪もの引連きて茶店床几は大あぐり官下木兔の権次よ京都の何とやら  
 いふ大盡り鴨川の流せと春の目ざりり心まはりせぬといつてげらびてみどか  
 まもその通り今こふて我等ハ親方の頭のと達てらびまあふまふまふとど  
 こへ行ても下へかり金銀ハ不自由る一男ハちつと次るまど今當代ハ繪事師  
 より敵役の方がひいさが多い世の中随分まがみどつていやぐのふてよー何



トいふさまぬいでふる上るを半七がやまゝあまうりト半七がとせむる手先も多勢  
よぶせいぶつやらふむむやらむるやらとさきそるれ半七ハ是非もろくひれ  
ふいて口惜一まごどむせむせむる悪者どもハ打笑ひきナリ権次いゝさまおやア  
ねへうこれおやア何ぞ惚れている三勝でもあいそうつうさアなるめへおてへ  
うぬが又藝者と色事でもえよふといふハかゝるつゝといふものどハこゝろあ  
さりの藝者と色とえよふといふものハ唐さんぞろいの金満の大尻り夫でなくバ  
黒羽二重のち屋敷さまそれ引くへうぬがさまア何こつと年季野郎を見るよふ  
る松坂島のまごれたのは小倉のちびの二重まはり見ぶん相應子どもの守りかん  
たさんと色事かうぬがなりにハ似合てる此のち後ろとつゝいゝ見付次第よ  
ままきよしてるめ川へどんぶりこといせせるやどは覺悟トあく迄みくき難  
言く言着アこれうらハないう達ハかゝるうはあつて豊月う金波楼でのこまを  
晩ハあつちへくすの面白程えつゞミぞんぞんく味増を上打連立  
て行あとは半七やつとさめいきつき半七エくちなやかれも大和町でハ人よも  
まろれ一茜屋と出店もかゝき半七が町も有ふ人立多い此親音の御境内で見  
うげもないうづせりめうてふちやくされ難言く言着熱よぶせいの手出しも

るす髪も亂れ衣類さへ引さうれさる此さまで何とうちへかへられういつその  
事今のやつあゝ追付てぞんぶんまうへ一とさうへで命一ツ捨ればそむさりな  
うかれが死どろ三勝めがさぞさよりのふかもふであると思へバそれも出来ぞ  
イヤとても此まゝ名賀町へかへりどろ三勝は顔があらされうあとかつうけてマ  
それくと尻ひつり上げて馳出を後のうとより半七まつとト立出るハ四十あまり  
の人品よき町人体のひとり男それと見るより半七がキアあるハ伯父ト人  
平在衛門さま半七エかのれハア下下居ヤト無理なせうぎは引をへてはこれ  
ハ五年いせん親の勘どううけどこへやううせなつこよよつてこれハ上方へると  
うせて一トかせぎして立派なつてこれ見てくれと古郷へ錦さうさる心トやま  
アさすがハどふらくをえとやど有てなもひきまのよい事と心でやめていゝ所よ  
此頃ハ又こゝろあさりへまい戻ッてそのよふなさまをうてまこつさるるとハか  
のれい親伯父の面へ泥をなするもなま事そまやも身そぎ世そぎトやりの  
盗賊さへせむ何とまてり耻うい事ハまいといふうちも商まいでもそる事  
う聞バ藝者の箱持とやらそのよふなさまもい事そるのこまうすまごやこからぬ  
好色故今のよふ悪者ホは打さうれえづうめられかめれより陸で聞か

二や腹が立つてゐたのが悪うてあつた涙がこぼれさハアそぞろやが若いときハ  
 二度ハまいりうと世はあるときハちつとハけいせいかいや藝者ぐるひもよるまけ  
 れど其まよるつてもそれやとさるなぬ目と思ハぬ人ハ根をうけ不時のさいる  
 んはあいかるハミなるかのが心がよかこる事その藝者の三勝どのとやらハ今こ  
 のあさりハ一といつて二とさくらぬ日の出のおうとドヤといふ事ハアア納手拭  
 ひもあるとより東名賀町芝屋三勝とさるハとでまわつてあるハそれとかのれが何  
 のいけもせぬくせよそこよりあさりへ立いるよつてさまの事が出来て親や伯  
 父はるんぎとかけるよふる事があるドヤそれまア今の若イハ打とく丸  
 とは無念口措く思ふなりハ向後こころと改めて身持と大切にして元の身の上  
 は立ちへるふとハ思はず追かけていつて存分は仕うへへそる向ふハ大勢こつち  
 ハ一人何ぞそれが一生けん命なるつとてういさい時から力業ハせむげへそ  
 る生れる者やどふりてゝあの一のうは叶ふものうそれのこまりす死とさそ三  
 勝が便りなく思ふふとハなめそぎと一言せめて其口で親や伯父が事を一言なり  
 といつとさるがけで聞と此平在衛門ハどのよふまア嬉しから六十は近ひ親を  
 持ことと言号のな國といふ女房も有身の上で今の身持ハ何事ぞアこれらといふ

伯父が詞を口惜く思ふる心と改めをこへると二三年身をかく一人かまうい  
 世でいりてうせおつる又その時でびの志よふもいくらもあるゆういふ  
 つく藝者や女郎の夏ハふむむいでも見まいとりの藝者んてさつと心を改め  
 やと親身の異見半七が身よとらんと有がるみハ半ヤモウ調子入まうと志度心  
 找いさうへまうて小商でもえりめまうて人並相應るくくをうてお目よか  
 けませうさるるがらかよふ申せバやふ言分のよふて誠の夏ともお聞るさま  
 まさまいるまどア藝者の三勝と申者ハまつく枕めいなる色の戀のと申度ハ  
 こざりませぬ思ひ出せもおとりの志うも冬の夜の私を其頃風鈴をバの荷ひう  
 里野も大磯花水橋身をたづめんとさる女が死をさめめいんが縁のえ一家へともる  
 いよふまを聞ハ鎌倉なる筒井家の奥女中勝野といふ人なるよ一思人なるの工  
 ぶよかハ里座鋪卒のくるハ女找進まておびけいふさまど行へさ野もさ身と聞  
 あまさととありハ一夜二夜三夜とめておんせる其中お思ひかけりい私ハ長の煩ひ  
 命の難と勝野が深切おんもあよむぬ着病ハ有がこいとも嬉しいともしいふい  
 こそぬ情を感じついでさるりおしつとあふ夫婦とるつくる此年月此身の貧苦を  
 しまくと相談のうへ此東へ下り後ハ藝者とるりはらいうるハ座さのつと



めこの半七も箱まきと餘り目をつくろふ夫婦かかんるんこき不孝の天罪と今  
 ぞ身おしる是までの不うちのかんく扱もあらば勘當の請とありへど此ありて  
 親類一家へ行末もさきか恥てそきもあせせむてありふたつうりて空しく暮さ  
 永の年月ツイ今このよふる短氣をおこしハ此半七の一生の請を此後心とせむ  
 おし何とぞ人並相應る暮ももるさハ其時ハかんごのむびをむんまらに伯父志  
 や人何とぞおののく申まさと泪とこもみ手を合せ平左門も鼻うちうぐ平イヤモそ  
 りやいといでもこしお知文ハい程かふるさむ短氣を出さむおそんるさむ  
 ハかへりままた又かさねて選まよと言葉どくるお立帰る跡ハ半七立上り半才伯  
 父トや人のちんごの異見かいてけるいハレそんるさむ今この奴ホの又こへ  
 かへらぬうちお名賀町へと面をつむ手杖の淺黄あはぬ深切の謀めお心とり  
 るさくまごくこして行跡およす杖をつくり見すまして小蔭を出て見送る男形  
 りもそろろ見まおしげお落る水鼻をりあげアテい一更を聞くとへ五年この  
 うい死んごと思つて煙のアノ勝野が今全盛の三勝で有ふとハ今日までハあふ  
 んごあいつめお鎌倉の屋鋪で色紙とやら何とやらを盗んで牢へ入らまこと聞い  
 くらてつさりこつちへおとがめか来るて有ふと思つておへおしくもねへ身上げう







やるゝ手切の金小判てきりも五十両耳哉やうへて幾へ出せ出せぬふくがそいと  
 うめもいふやうにして代官所へしめて行かぬ引の半とと誰人へくも言と親とが生て  
 り申するんと申すてもまことなぬりて無法の議を半七へもてあせりてぞ見へる  
 四五六もあつてけあがるは世なぬりまじぬハるまきふけなまやう面を思き  
 るがくむぬくその口をいふまはさうやるべいりて半七は足踏よせん  
 さる足踏きつくととさうへてむぬんをこらへ半七のりといへど無伴の有は伏平左  
 衛門どのが昨日の異見を思ひしつと半七とていふ男の面へ泥脚はあふも  
 く書あつてその口惜しむるまはさうへて四五六思ひあつて半七を言やまはぬ何  
 かい手向ひさせば伯父ハ親三尺高く木の空をうみんとぞもても五十両出せの  
 ぐいやるゝ三勝でんせ半七をいふ半七は半七の面を思きしとて我候一とてい  
 隠居の左のうちへてかく心り半七をいふ半七は半七の五十両三ツは一ツの返  
 答もさうへとめりける表よりかき深編道大小判の侍が半七の金身でもがと  
 へてへ半七をいふ半七は半七の腹中よりいふ半七は半七の金身でもがと  
 半七は半七の腹中よりいふ半七は半七の金身でもがと半七は半七の腹中より  
 こそハかためつて半七をいふ半七は半七の腹中よりいふ半七は半七の金身でもがと

るる奴が無法のあせぬせいせんより門口てつくと見聞いぬ半七もそと  
 の懸忍ぶよいとぬいひ伏見こんで武士が刀よりけかくの申つた一義有てど  
 こぞ参つてる某をせうるがらつての印の五十両時の用は八もそくと下世話  
 のくとハハ者つりハをきて此場のかさぬり町人金子糖は讀取くもそと  
 の家は用事ハ有るまいとつと出てうせなりぬり半七は金で何れも用ハご  
 ざりませぬぞいふんともと参りまはつて床氣味とるまは門は出向り心は二思あ  
 ひつ返してぞ裏口へ志のびてこそハ入るぞとハまらぬ半七は彼の侍は打  
 むりひ半七のつてぬりぞんがませぬと五十両といふ大金もか出へるまはて  
 の難義をか救ひるまはてく半七は半七の半七の半七の半七の半七の半七の  
 くるひまらるる事さる半七何れりともと聞て侍打よろこび半七ハ義知の議  
 足くまらる上ハ某が性命をト笠ぬき捨る打もあま湯りらもどぞ半七ハ顔見合  
 せて三ツはああるハ厚倉次郎太夫とぬ半七ハ聲が高い勝野久らうてあいま  
 半七ハ二人がまど半七の懐旧のるまはてく半七は半七の半七の半七の半七の

第五回

斯て厚倉次郎大夫ハ勝野ハ三勝の是にて一部始終の物語を聞事毎ハ歎息四  
 が見廻一聲を展め次郎ハ半七との寶殿を豫て御業知らんが先頃よりの主家  
 此浮沈此方種々ハ心をもて今日まで世間へ何事も願はず居るごよまごら  
 まぬハ色紙の行衛をまきばまきり盗人も遠りぬは館のうちよめと思へど表  
 ぐちてせんごもるごもるごもるを説さんもの外も昨日漢草の始末といひ今又四  
 五六とやらんぐむくのの通言もまづと辛抱いんごもる半七どのの魂見こんで頼  
 むこの一條何卒拙者よるをりハ定家の色紙のせんご仕出簡井の家を泰山の  
 安きよるさバかのづりハ勝野が昔の悪名をまづくのハ半七どのの思ふよまて  
 る身の幸ひ此一義をバ頼さんとごのふごく觀音の地内て不思議は手にい  
 締め手拭ひ證據よ一てごね來て各領町の笠屋とかまごのよまんの文字を目  
 みる一雨もぬ貴ごんの業知て満足と嬉ごごご半七も半七も何ごは意ごよま  
 ますかかハ三勝ハ咄も心よかると聞る色紙盗ごかくせ其ハ人ハ結ハ今市布  
 施のやりちと思へど愛ごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごご  
 山吹の花物いとぬ胸の内半七せんごの役目をバ此町人の半七も仰つけらご  
 ごとごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごご

勝ハ縁引のまごらごの世のそごも何のいとごごごごごごごごごごごごごごごごご  
 義して浮世を廣ハ三勝と次郎の時ごそハ次郎大夫が仲人いごごごごごごごごごごご  
 までの夫婦の益ハごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごご  
 つまごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごご  
 るごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごご  
 次郎ハ勝野ハあごぬ三勝どのの三ごごごごごごごごごごごごごごごごごごごご  
 きん押あけ入まる折りりあごてごごごごごごごごごごごごごごごごごごごご  
 官藏子ごんの悪者引つごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごご  
 へ入らんごする次推次を聲りけ推ヨごごごごごごごごごごごごごごごごごごご  
 きのうちの内事主やら箱廻りやら飯焚やら三役三役相勤らる半七どのごごご  
 勝どの全盛の藝者て誰かごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごご  
 きんごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごご  
 きがごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごご  
 所てごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごご  
 のるごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごごご

つろいなるむらりのつらやい左様きりらむハ野暮の至まどべつと非み見て  
 ぐんろうつまやいじんやアヤの仲間入をせらまむとやたり昔も忘れぬ二  
 勝ハ武士のくまーい治世又乱世こそまきばとくんがうとやら悪法とやらのきよ  
 もつもあるとほしくなやむのたるーナントかみいみ筋目くぐーい立派な男の  
 ゑこの末免の権次が仲人して三勝どのへもこりののきるーよもくせーてはけ  
 りるトところせだまづるがまびんくうつハりあそむけ三つやどつてはけはあ  
 んの世話よもるらぬことばごんさんまぢごうんまてとへひとりで居あふ  
 半分ていよぶがまへるのかねつて度々やどつてはせぬやまゆみのもちや  
 の亭主まのとかーつけりて今日の始末もして持つてかへるまてんせー聞  
 官藤打笑ひ官コトく三勝そや何れかみのぐたとへいやどもかふてもかまも此  
 土地へハ相應は頭とり親方とりてらる。此入聞官藤亭主もしてふそくハあ  
 るめへ是非とも今日りく愛の亭主三勝そも思ふてくそで下傍若無人の高あぐ  
 烟草くもらう輪は吹くハいとよくまびん見へよける三勝なるやの腹へー三  
 けがりハーい何のかのまびんぐてへへまびんぐてへへまびんぐてへへまびんぐ  
 マイ亭主つていこのまびんぐてへへまびんぐてへへまびんぐてへへまびんぐ  
 ヤマコトやマコトやマコトやマコトやマコトやマコトやマコトやマコトや

た亭主といふハ半七見るかけもねへ貧乏野郎を亭主とてふことまじいコト半七  
 が亭主よしるからがる頭官藤さまがぞつこん惚てやれぬいた此三勝が亭主ま  
 るいりかよつてりういよ來とをよくうんと三勝を官藤さまの奥さまよくれて  
 ままへバその通り四の五のぬりせバ浪人組が刀よりけて貰ハよやるらぬ半七返  
 直ハドどぶどまエめつそうる何の三勝さまいよこくしがためハ主人も同せん  
 紳もつて夫婦じやるぞと思し召して下さりませるま三勝あねを聞さうスヤ半  
 七ハそのえうが亭主でハいるさすせバ主なきそものえらふうりかねが手活  
 の花よトえまごまかハバちやつと飛のき三サアとしが夫といふこのハ半七さ  
 んでハござんせぬ外ハ立派なよい男が兼てコトやむしりい見るかけもねへ箱  
 のハ半七さう相手ハハなくまよふ足の貧乏野郎その半七をとつてのけて外ハ亭  
 主があるならバ亭主はあつて三勝をもろうう但しハ又おいらが取持として其男  
 んをよよくそとてなくものウニッハその男はあつさうへでのせんさくど  
 ナその亭主はあつていト根つよくいられ三勝ハ何といへもさうくまひよ  
 んまごさく九言出して手に汗まざるたうりなり夫と見るより浪人組コトや  
 アさうしい何そんものがあるののうい半七をのけて三勝が亭主があると云と



とまゝ三日とせしむる悪度心つきこれ定めり三勝がまゝとまゝなるまゝあるまゝと  
 さあつて三勝がうちへ行くとハサドめてるれどやる珍事のせつるれどそれせんかへん  
 と仲町と聞かされてもつれづれとひとりの三勝内のごん 善七郎ア羅アクヤア岸うつま  
 かの三かつが住居をばつててへ来りけり  
 アハミぐまのハト願禮の子がうとひつゝ門は物もあはれが聲は三勝化粧して  
 奥のト間居たりが聞てそなるをぬんはいの煙草箱よりまを鏡のまこと  
 ながうよる通さよび三コレ通や今門は立と願禮の娘の子と一もそまこと同トこ  
 ろやんは父さんや母さんうないうして年をもめらぬおさるいもの願禮さすと  
 ハ不便事アをやふ此錢をりつていつてやアやれいのト母の詞は通ハなうい  
 でつアアあげまゑよトさーいどせばうけとつていと嫌げないたじきて行返る  
 みそ三勝はいとごあまれみを通はむうい三そまことハまご四ツのぐらんせなけれ  
 ばあるまいがそまこの父さぬハ大和町の茜屋半七さまといふかろこと一も昔  
 ハ筒井さまのなくとつとめもの縁でがな半七さまの御流浪のうらふと一と事  
 で夫婦とるまそまことかハもふけとれとそれうらこと一ハ藝者費をい子う有と  
 いふてハか客のふもくぐさるいよつてぬいと世間ハ箱持といふより  
 そまことバ外へあづけておいとれどいつぞや半七さまのてへごさま御死去の後  
 半七様御本家へかうへりなざるにつまらしい時うら言字のかそのさまとい







うのへしほしはこぢかしのへめおしは夫とてんかむ五十年のうらなひのこつていふに  
 のうちおんちをばせあり仇めた一事ハ驚たしめた心を不便と思ちて侍父せぬの  
 まつらぬおん三勝と縁をばせしとてぬるのをいぬのせし三勝をいへしぬ  
 るおんおとけハ顔ハまらぬとぬるのをいぬのせし三勝をいへしぬ  
 としちぬをばせぬおんかむせしちぬをばせぬおんかむせしちぬをばせぬ  
 親類のしちぬをばせぬおんかむせしちぬをばせぬおんかむせしちぬをばせぬ  
 かこむまはせぬおんかむせしちぬをばせぬおんかむせしちぬをばせぬ  
 伐せぬおんかむせしちぬをばせぬおんかむせしちぬをばせぬおんかむせしちぬをばせぬ  
 びかおとあふちぬをばせぬおんかむせしちぬをばせぬおんかむせしちぬをばせぬ  
 のしちぬをばせぬおんかむせしちぬをばせぬおんかむせしちぬをばせぬ  
 せぬおんかむせしちぬをばせぬおんかむせしちぬをばせぬおんかむせしちぬをばせぬ  
 くのひりかおとあふちぬをばせぬおんかむせしちぬをばせぬおんかむせしちぬをばせぬ  
 勝せぬおんかむせしちぬをばせぬおんかむせしちぬをばせぬおんかむせしちぬをばせぬ  
 一かかへしちぬをばせぬおんかむせしちぬをばせぬおんかむせしちぬをばせぬ  
 へぬおんかむせしちぬをばせぬおんかむせしちぬをばせぬおんかむせしちぬをばせぬ

るはとぬ玉幹の道も聞へしちぬをばせぬおんかむせしちぬをばせぬ  
 行儀の心あつておんかむせしちぬをばせぬおんかむせしちぬをばせぬ  
 ちやん半七ちんハ家出ぬおんかむせしちぬをばせぬおんかむせしちぬをばせぬ  
 るはとぬ玉幹の道も聞へしちぬをばせぬおんかむせしちぬをばせぬ  
 知てハ思せぬおんかむせしちぬをばせぬおんかむせしちぬをばせぬ  
 め一か前の所へハちつとハ思せぬおんかむせしちぬをばせぬおんかむせしちぬをばせぬ  
 機のおあんどもせぬおんかむせしちぬをばせぬおんかむせしちぬをばせぬ  
 所をかまらぬおんかむせしちぬをばせぬおんかむせしちぬをばせぬ  
 ぬ一の在り家もまらぬおんかむせしちぬをばせぬおんかむせしちぬをばせぬ  
 るはとぬ玉幹の道も聞へしちぬをばせぬおんかむせしちぬをばせぬ  
 か氣のちぬをばせぬおんかむせしちぬをばせぬおんかむせしちぬをばせぬ  
 いるおんかむせしちぬをばせぬおんかむせしちぬをばせぬおんかむせしちぬをばせぬ  
 定家出ぬおんかむせしちぬをばせぬおんかむせしちぬをばせぬおんかむせしちぬをばせぬ  
 をまらぬおんかむせしちぬをばせぬおんかむせしちぬをばせぬおんかむせしちぬをばせぬ  
 うはとぬ玉幹の道も聞へしちぬをばせぬおんかむせしちぬをばせぬおんかむせしちぬをばせぬ





が重り若萬一の事有らうあの子が年ばも行らねへでどふまらふと思ひまゐる  
 尤夫ハ半七さまの御本家が丸いとしてゐる度さうさ定めりか引取るそつて御  
 清もさされうサえさか肝心のえんやうの且るといふのの家出をなすつて聞  
 伯父御さまとやうが御後見をなさつて御出なさるとの事そふいふ野るれバ何  
 半七さまのな種はちがへねへを通さんでも引取つてか世話をなされバいひが何  
 ざうどふもアかなつら無思すそふなつてさううしろ恐ろしい今の世の中うまい  
 やあの子ハ悉くてもううれ年もいけねへでどのよふる難辛苦をえよふもえれ  
 ねへサそこを思ふとかめへ獨りの身トやアねへうう階分と身を大切ふりてえや  
 くよくもつてどーきへでも出るよふまゑせへる私だといつてこんる商賣往來  
 するいまやうをいゝとてゐるといつてかもしろくもなひ事が有てもか客のふと  
 もといていけバぶつてうづらゑてもいけねへうう笑顔としてこりつける洒落  
 でもいつこり馬鹿な真似をえたり尤氣をとり直してさーきへでも出て見ませへ  
 今迄ハ三勝半七と浄名の立なかりへかこの事さううらふつてさる客事もうつこ  
 が半七さんの家出るそつと事も悪事千里でとをいふとも無世間へえつとをれて  
 有らうし又世話をえよふと何とにいふ客かいくらも有やそといつたらめへ

の氣よさハるさううがハテア真女兩夫ままみへぞ忠臣二君まつりへぞまどいやや  
 がとい事といつて長くの浪人者へ御合力頼ひ上ますと印判の墨がなつりけそふ  
 ま羽織着深あま笠をうぶつてやぶれ扇を以つてゐるひても殆まらねへせんさ  
 トやアねへへ尤が侍様なんぞハそふいふ事も有ふけれど何もなまへが半七  
 様の御本妻といふトやアなまゝして今だんなのな行るが知ねへううの事さうう  
 どんる事をえなさつこといつて何れぬの御外聞よさハる事も有めへトやアね  
 へうア芝居でもよくする事さか真女と捨て真女と立と常盤御前とやうを見ませ  
 へいやま所が現在敵の清盛入道の心よまごつと斗で一人の子どもの命をと  
 そけふさうび源氏の世よなつたトやアねへへ何うさうさごんる高慢さる  
 事をいふよふさかそこハ貸本屋をそるかりげまやア此位な事ハまつていやそか  
 の川柳点まか一本や外題をうりの學者さるといふがひままる折まやアちつとハ中  
 も見やそらうよこ利くつもいふのサねア發へて見やうものる朝うし出まくて  
 も相應る人の世話よでもり樂は喜ぶしてサあの子よも餘石の子が木綿さきる  
 所を結とさせ結とさる所さ縮緬さきせて背てあげて見るせへ半七さまが聞  
 まそつて腹を立てなさるよふさううがやアねへへやそんる人は肌をよれと









りふと来りてござりて此程りら座敷もひいてかきまへり何のせり座敷いふて  
 どき程の縁が有ふよふ考ても見るさんせき「△」そんなるん、半七の行衛ハかぬ  
 ハ来るねへり座敷のくハ書言たててこそ聞かぬ「△」三がまへもあぢぢ事な  
 さん私ハ半七さんの行衛をきりぬといふが書言やといふ書言たてては半七  
 さんさ書言ハいよく半七の行衛をきりぬといふが書言たてては半七  
 たりバかぬ「△」言状をこつて書言へ二年の三勝でも心の痛めてはつれり  
 しい事とりかいてかれが世話をきてやらう「△」三勝事なまは三勝事なま  
 何より安い事なぬといふは偽の事なぬどのよふ書言ても立ませか書言  
 「△」こみさや書言を書言や書言「△」三勝事なまは三勝事なまは三勝事なま  
 手はと書言「△」こもていひなきも用い遠慮ハねへ何なりと不自由ら初  
 子みいぬぐまこそがはい「△」三勝事なまは三勝事なまは三勝事なまは三勝事なま  
 手はと書言「△」こもていひなきも用い遠慮ハねへ何なりと不自由ら初  
 を舟がくつて先へり入つていひなきも用い遠慮ハねへ何なりと不自由ら初  
 そんなら旦那私ハ三勝さんといひ「△」三勝事なまは三勝事なまは三勝事なま  
 今よくらくるりや「△」三勝事なまは三勝事なまは三勝事なまは三勝事なま

よむく「△」三勝事なまは三勝事なまは三勝事なまは三勝事なまは三勝事なま  
 かのやりつけま「△」三勝事なまは三勝事なまは三勝事なまは三勝事なま  
 のか行衛ハとよ行くきりぬと申よつてきたりぬといふが書言たてては半七  
 うけと申ま「△」三勝事なまは三勝事なまは三勝事なまは三勝事なまは三勝事なま  
 頁を女ハとくと見るよりも「△」三勝事なまは三勝事なまは三勝事なまは三勝事なま  
 衛コリヤマア普兵衛さんと志くらよりろふぞい「△」三勝事なまは三勝事なまは三勝事なま  
 さき升る管へ火の中水のりよかくと出るされうとも尋ねい「△」三勝事なまは三勝事なまは三勝事なま  
 るりよく笑ひ顔を見せまはさるる思「△」三勝事なまは三勝事なまは三勝事なまは三勝事なま  
 ぬか心を随ふか持るさまませ「△」三勝事なまは三勝事なまは三勝事なまは三勝事なま  
 の女ハ何等の人よ下巻を讀得と考らん「△」三勝事なまは三勝事なまは三勝事なまは三勝事なま  
 何不足るく喜けるがいつまでり斯く心よもまなぐがむす「△」三勝事なまは三勝事なまは三勝事なまは三勝事なま  
 といひ未半七が行衛の志まはる「△」三勝事なまは三勝事なまは三勝事なまは三勝事なまは三勝事なま  
 けはまバそまが元トるり次第は目りきみて見へまなりけはま座敷も動りがなく  
 名賀町よを住まこれねバ氣力泣々「△」三勝事なまは三勝事なまは三勝事なまは三勝事なまは三勝事なま  
 屋よ引移りぬ







されてお行衛をれをそれと苦よやみ母ハなついで目ささへふきつぶりかんらん  
 辛苦も皆そまこの父様のハサアを運や泪をふいてやりまをやう泣むのでいまい  
 くよるそのよふよ泣とかたけが連は来るトそうせと聞そ足どりして運サその父  
 さまがとづねて来さめめを見さよ依てこりや嬉うてくごうとやうとまされバこ  
 りい顔してみりめ飯ろふとそるよよつてモウくごうとも何とも言ひハせぬや  
 どよどよ家よいてどつこへも行て下さりますそよまこるバ母さまの目も  
 どんぐとよくるろうごりやどよふなりとよいけれど母様がいがごりいりどよどよ  
 ぞ家よ居て下されとむれどとまよす出て行いやるよよつて夫でうるまふてく  
 泣まよとト断を聞て半七ハさてハ親子の情通ひを通が夢は半七が来りーと見  
 其夢こそ正夢よーして半七ハ妻や你が恐愛は引れてこり迄来れども選バる  
 れがさぞるんと熊と氣強く名のりもせず只よそがう顔を見て飯らんものと  
 思ひーは斯くまで去こみ現在ののこ子とそてく旅他國は辛苦をそるも五十兩の  
 大恐うけーその人よつごひー言バを守る故エいつその事ううへ這入て名のろふ  
 うイヤ生者必滅會者定離あふといふ事が有バ又ごりるといふ事有それを思へ  
 巴却て爰で名のろすは別る方ぞまよるんと二足三足あのみーが去るよても

三勝がこれといく恨みかりて苦むの事が有るうバか通ハ何とるりわくべきと  
 くと渠が心の底さううらハなやと思ひけれバ又立飯り門口は立聞そるとも神ま  
 けぬ身ハつめさるぬ三勝が三ヲを運そんるんといふ父さまがたづねて来さ  
 まやつと夢を見さとう日頃うう子心はも父様はあいたくと思ふ心故そのよふ  
 る夢を見さものであろうふんふんきづよいお方トやとてこりうありへ来て居  
 る位なりバ私ハみかんハかくとてもそまこみ遇ひは見へるであらふよ大方御賢  
 の銚義は遠い國へいんで有故音信もなぬ扱有とハ思ふていれど若や旅で  
 何事有ハせまいり女子の男親の夢を見るハよりぬ事といふるよ今朝のか  
 うするまといひ此二三日こり肉のうごくのも何ぞのまらせでハあるまひうこ  
 ふいふ時とのむハひとへは神仏南無正親世音菩薩さま金比羅さま何卒夫の身の上  
 まなふことといよまよまもろせたまへト手をあハせらるごなたとまよーがむむ  
 やつれーなもどー半七ハ戸の透間よりううひ見て半ヲこづう三年たりの  
 その間よあの年のふけたることハそよでもあうふり髪といへたいつとりあげと  
 事もあるさありさまといひ身ハつづれさまとひこれバ昔の色香もとへえて見  
 すおろげる形りうところを運もいうふ大さふまつと目元より口もとるり親子と

いふてよふママアノ三勝は似と事と面といひ心と云そろひもそろひといひ子  
 名のある事さへる出来ぬハ何とる因果の我身やと恐のびまげくぞ理るれうち  
 よハ是をまろざれバ三勝ハ通はせりい三毛泣きやんるあすハ隣の伯母さ  
 まとこのんでそまこの髪を美う結ふて賣ふて此間買ふとやつこの銀ささ  
 てるもふてあるそでさ一羽織ときて観音さまへつれて行まーやうなとよかると  
 を泣まいぞくかん音さまへ行くと本店で何を買ふアソをれく此間うらるーが  
 買やつたぢいさる三味せんよか又腰打の人形何でも好きな物を買ふてやるふ  
 るどよモウ泣やんでをやくを我て飯を喰ふて寝やいつものおえなるとして聞せ  
 まーやううといろくさあくそうせどもとよりくを通ハまくり位通いでさーやま  
 三味せんも人形もろーうハない父さまを呼んでくどされ父々さまがいやまやれ  
 ぬくういるとさーや飯もくひとふない父さまの居る所へ連れていんで下されト母  
 よとりつきめりうごか泣せがまれて三勝ハ殆くこまり三コハまこりまよとい  
 やるその父さまのいやまやる所がなれて居るものまらばうふーてハ居ぬとくみ  
 も尋ねて行といがどこといふあてどハな一今又うも盲目となつてハことハ途中  
 さんがいあふことでもこつちでハ知れぞそまといろく顔もおかへてハ居まい









死んじうちもあねマノ半七の情を立るもいふねへ更ぐモウ大概いして貞女と  
 やらちめひつちおまじい更を聞てくまろ旨いもつていおぬうんと  
 さへいへばそんる形をさせちやあねお通請とも引とつて居膳で飯をくせせて  
 おくはごうしへト飽まで傍若無人のありさま三勝いとい哀しく三ツいそん  
 るらそるん官藏とる色紙の盜賊その有家をと言やサとぬや官ヲサをまも  
 随分いつて聞せめへののでもぬへかぬうんと兼知さへまは夫婦のまうの更  
 じののを色紙いおろう首でもやるが否といへば是非かぬへおののじが通の  
 ろとも此世のいとぬを取らせぬやるぬめトおのの通いなり目を見通アレ母  
 さぬこい伯父さぬがとあるへる我子さぬかへ三ツい更いりく母がついて  
 居る福ぶさぬもよ更ぐやるいおつうりとまへつりついで居やとお通をだう  
 へてゐるに居まば官藏いせう笑ひ官コレ三勝まじつめいおいつて聞させる一大更  
 がある實いといふと今更おまじい登るといふいおぬへや半七が探もある  
 く色紙の更その色紙いおま更おまじい持て居るハト出で思まじい三ツいそんる  
 定家の色紙いおま更おまじい持て居るとるコレお通やア伯父さぬが何う持てい  
 やちやるう通アレ何や紫の服沙つんじちい箱のよるもののを腹うら出

て三ツいびります三ツいそりや大う色紙の箱で有いよくそま違ひいりい  
 官コレ疑ひ深ひ此色紙さる堂上かへさあて出世の種さる大更の物じがて  
 めへがうんといつておま更おまじい抱きまて寐まじいおのちやるまひめのもお  
 へが何とだうまて寐る氣いりい殊よ半七と別まて三年一男の肌もあるめへ  
 と思やア箱ののまじいひびびびへトあるまじい手さぬまじい三勝い心の内ま  
 だましてつんと笑顔をいつり三ツいるやど今迄のやうついでいもの一見るかげも  
 るい此三勝さぬまじいおまじい思ひて下すりまは官藏とまその色紙さへんまやま  
 うとい更が真實まじいおまじいおまじいおまじいおまじいおまじいおまじいおまじい  
 爰でだうまて寐る氣いりい三ツいるア官コレ何や紫の服さぬと早過るもへ芝  
 居てもよくある格で官ののがやへひむつうりお心おまじいおまじいおまじい  
 あるがその手やアねへん三ツいおまじいおまじい疑ひおまじい降も遠い此ツ家殊お夜おひ  
 更ていある一おまじい目の不自由もの一更おまじいおまじいおまじいおまじい  
 いうままそまじいおまじいおまじいおまじいおまじいおまじいおまじいおまじい  
 直は寐つくといナア何おまじいおまじいおまじいおまじいおまじいおまじいおまじい  
 んせんう官コレ酒うそりやアありおまじいおまじいおまじいおまじいおまじいおまじい







て番頭ハヤ〜〜〜つてうま〜〜〜ガリ甚クハ又〜〜〜つて思召ノワト殿秘でハ今  
 の注文〜〜〜りよううう〜〜〜「ヤ〜〜〜ヤ此番頭〜〜〜を権〜〜〜まき甚屋の家ハ  
 大磐石めで〜〜〜ト互ふよろこぶ折柄ハ一五一十を最前より外面ふうう〜〜  
 一人の武士「イヤその相談ハ思〜〜〜と笠脱捨てうち入る顔見ては者ハ悔りそ  
 いりかふかんとさるをそつ首〜〜〜ヘ「イヤ〜〜〜へ〜〜〜遊るとて遊〜〜〜立派の痕  
 其院先達〜〜〜ハ長九郎淺尾ホと合体〜〜〜勝野を無實の罪おあ〜〜〜今又〜〜〜番  
 頭めと言ひ合せお闘ガ貞操〜〜〜ら〜〜〜せんとき番頭〜〜〜か奴もよく〜〜〜見ま  
 ばさいつ頃入間ガ手下と三勝ガ彼の名賀下〜〜〜居る頃悪徳入〜〜〜破落戸木鬼の  
 權次とやらそこ〜〜〜寸も〜〜〜く〜〜〜ぞ〜〜〜お闘どのそ〜〜〜ハ未〜〜〜るま〜〜〜か拙  
 者事ハ餘倉星の井家の老臣厚倉次郎太夫と申者半七事ハ色紙の情家せんぎせ  
 んと我ハ義理〜〜〜國達〜〜〜か此石ど〜〜〜び故郷〜〜〜へりて思〜〜〜三勝ガ隠家  
 さま〜〜〜其夜〜〜〜官藤〜〜〜打て御室〜〜〜取〜〜〜へ〜〜〜ハ近々木家〜〜〜立  
 腹〜〜〜必〜〜〜あ〜〜〜ん〜〜〜ざる事〜〜〜また淺尾今市布施の筆〜〜〜隠謀〜〜〜せ〜〜〜う〜〜〜ハ風お  
 ひ〜〜〜此法印權次〜〜〜り〜〜〜とも刑罰〜〜〜せんぢうの〜〜〜る〜〜〜す三勝ハ半七〜〜〜を苦〜〜〜や〜〜  
 て盲目と〜〜〜つてあり〜〜〜つと半七〜〜〜逢ひ〜〜〜てよろこびのあま〜〜〜病〜〜〜ひもよ〜〜〜こ〜〜〜

ろよ〜〜〜彼の有松屋管兵衛と名無〜〜〜三勝お通を賣〜〜〜たるハ笠松屋の番頭〜〜〜してそ  
 の方と平左衛門ガ三勝へ寸志お〜〜〜る〜〜〜者〜〜〜のよ〜〜〜ハ我犬をい〜〜〜てよく志を  
 ハその趣とも三勝半七〜〜〜語り聞〜〜〜せ〜〜〜ま〜〜〜ハ兩人も御身ガ情を感〜〜〜よろこべる意う  
 ざりる〜〜〜斯るう〜〜〜ハ思人〜〜〜仁善人榮〜〜〜星の井の家萬々蔵甚屋ハ永〜〜〜く出入を申〜〜  
 けんと残る〜〜〜る〜〜〜さ取〜〜〜り刺〜〜〜さ仁意も厚倉次郎太夫ガ詞〜〜〜ハお闘母妙開よろこぶ意  
 ぞ〜〜〜ひ〜〜〜ひ〜〜〜斯〜〜〜て印〜〜〜る〜〜〜す三勝ガ眼病も平愈〜〜〜け〜〜〜ま〜〜〜半七ハ甚屋立〜〜〜へり  
 お闘ハ本妻三勝ハ妾と〜〜〜りお通をいつ〜〜〜く〜〜〜ハ妙開〜〜〜へ奉行を〜〜〜平左衛門を大切  
 ふる〜〜〜星の井家の御用を達〜〜〜々〜〜〜ま〜〜〜ハその家富榮〜〜〜へてめで〜〜〜を〜〜〜るを迎〜〜〜へたるハ  
 め〜〜〜り〜〜〜りなる物語あり

三勝半七

明治十九年十月五日 日御届 定價金三十錢

故人

為永春水作

東京府平民

出版人

武田傳右衛門

京橋區彌左衛門町十三番地

大辻岡文助

鬼屋誠

鶴聲社

春陽堂

上田屋榮三朗

鈴木喜右衛門

東京書林會社中

